

数学者ってどんな人？

「数学」と聞いただけで、逃げ出したい人になる人は結構多いのでは？

大丈夫、雲の上の存在のような数学者の方々も皆さんと同じようにいろいろ考え悩みます。数学者が登場する楽しい小説も書かれています。ここに紹介する本を読んだら、もっと「数学」が身近に感じられるはず。

東京都立多摩図書館

<http://www.library.metro.tokyo.jp/j>

平成21年5月

『博士の愛した数式』

小川洋子著 新潮社 2003年
(新潮文庫 2005年)

ISBN 978-4-10-121523-5

家政婦の私が派遣された先には、記憶が自由な老数学者、博士がいた。2人の間で毎日初めに交わされる会話は、必ず靴のサイズや電話番号など数字に関すること。

コミュニケーションがとれてくると、博士は数式的美しさを教えてくれた。

そのうち私のタイガースファンの息子も加わり、3人の間で数式を交えた親しい関係が芽生えはじめる。



もっと知りたい！

—数学に出会える本—



『数学をきずいた人々』

村田全著 さ・え・ら書房 2008年

ISBN 978-4-378-01831-7

『はじめてであう すうがくの絵本 1～3』

安野光雅著 福音館書店 1982年

ISBN 978-4-8340-0908-8

『生き抜くための数学入門』

新井紀子著 理論社 2007年

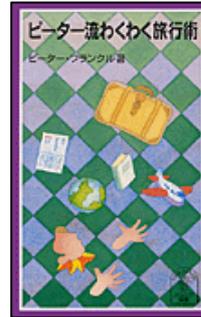
ISBN 978-4-652-07823-5



『若き数学者のアメリカ』

藤原正彦著 新潮社
1981年（新潮文庫）
ISBN 978-4-10-124801-1

1972年、若き数学者である著者は、研究員としてアメリカに渡る。見知らぬ土地で過敏に走る感情、冬のミシガンで苛まれたホームシックとノイローゼ。太陽のふりそそぐフロリダでつかんだアメリカへの愛情。そしてコロラド大学で助教授に。この間の様々な人々との交わりを通じて考えるアメリカ、そして日本……。初めての外国に踏み出していった青年の心情、姿が見事に語られた留学記。



『ピーター流わくわく旅行術』

ピーター・フランクル著
岩波書店 2002年
（岩波ジュニア新書）

著者は、数学者であり大道芸人。日本国内はもちろん、世界各国を旅している。本書では、旅のエキスパートである著者が、外国の旅日記、国内の旅のエピソードを交えて宿の取り方や防犯など実際のノウハウや、旅に対する思いを伝える。著者にとって旅とは、人との出会いであり、その地の生活に触れて異文化を理解することだ。自ら考え、自分の旅の方程式を立ててほしい、それが読者へのメッセージだ。



『算術少女』

遠藤寛子著 筑摩書房
筑摩書房 2006年
（ちくま学芸文庫）
ISBN 978-4-480-09013-3

江戸時代に発展した日本古来の数学、和算。神田白金町に住む町娘、あきは町医者の子から算術（数学）を学んでいる。その才能を聞いた大名、有馬公はお姫さまの算術の師匠として、あきを採用しようとする。だが、もともと有馬家に仕えている算術家は、13歳の町娘が当家に入ってくるのが面白くない。そこで……。